

30号を記念して特別紙面

広報部部长 川畑道子

「季刊やよい」も早いもので、十一月二日発行の今号で三十号となります。これも偏に皆さまのご協力ご支援の賜だと広報部一同、深く感謝いたしております。

今回、三十号を記念いたしましたして、増ページを削り、八頁という充実した紙面でこれまでの季刊やよいのエポックを取りあげ、皆さまと弥生会の七年半の活動を振り返りたいと思います。

また、これまで季刊やよいは、多くの外部識者様からご寄稿をいただいて参りました。充実した内容になっていたのでと自賛しております。ただ、弥生会会員様よりの「寄稿や」意見が少なく物足りなさ、堅苦しさを感じておりました。

今回三十号を記念して、「弥生会」発足以来、七年半を経過した「皆さまの現在」を取りあげたいと企画いたしました。

紙面の制限もございいますことから、会員様お一人お一人にお声を掛けられませんでしたこと、おわび申し上げます。次回三十一号でもコーナーを設けますので、どんな内容でも結構ですので、ご

寄稿いただければ幸いです。

左の写真は平成二十年八月五日に発行した会報第一号の編集に当たって福田市長に広報委員会としてインタビューした様子です(市長室で)



弥生会の皆さまへ

山本公仁子

風にそよぐ木の葉の音を聞くと秋の深まりを感じます。弥生会のみなさまにはますますお元気で活躍の事と存じます。

さて、夫、山本繁太郎が亡くなってから、早いもので二度目の秋も、弥生会の皆さまの支えがあつ

を迎えました。

思い起こせば、弥生会発足会で初めてお目にかかっていたから、長きにわたる後援会活動や選挙活動、

その後の知事になってからの活動も、弥生会の皆さまの支えがあつ

てこそ続けることができました。

夫亡き後も何度か皆さまから励ましていただき、助けていただきました。本当にありがとうございます。

夫にとつただけでなく、私にとつても、皆さまと共に歩んだ数年間は極めて貴重な体験であり、宝物です。

夫が足繁く通い、心から大切に思つた岩国のますますの発展を私

も皆さまと共に願ひ、皆さまの活動に心を寄せて参りたいと思つています。

この紙面をお借りして、弥生会の皆さまへの心からの感謝を述べさせていただきます。

一日の始まりは朝にあり

川崎明美

この地に嫁いで早五十年が過ぎようとしている。振り返ればあつという間の五十年のように思ふけれど、反面、長い人生でもあつた。

昔、母が「一日の始まりは朝に有り。つらいことがあつても笑顔で仕事をし、子供達を送り出すこと」と口癖のように言っていたことをぶつと思ひ出した。

日々の生活の中で母の言葉がよみかえる。大切なことを教えてくれた母に感謝の気持ちでいっぱいである。

今年の夏休みも、二歳から八十過ぎの地域の人達が、ラジオ体操に参加された。

一番うれしかったことは、「ラジオ体操は自分の健康のためよ」と口々に言ってくれたことだ。

「小さな輪でもいい、継続する事が大切」と改めて感じた。地域の人達が一日でも長く健康で暮らせるように、私も微力ながら貢献していきたい。

孫娘の喜びの日

檜原富美枝

夏もそろそろ終わりに近い土曜日、わが家の孫娘の結婚式に愛媛県松山市に出かけた。

朝七時に家を出発、爽やかな空気に包まれ、柳井港につく。出港の準備の整ったフェリーに乗り込み、往路二時間半のオレンジラインを行く。内海とはいえ、久しぶりの船旅を心ゆくまで楽しむ。

予定通り結婚式場に到着、早速礼服に着替えて席に着く。

ほどなくウエディングマーチの流れる中で新郎新婦が入場。思わず感動！孫娘との二十六年間の数々の想い出が頭をよぎり、臉がうるむ。ウエディングプランナーさんがそつと私の肩を抱き、「す

夏もそろそろ終わりに近い土曜日の声をかけてくださり、少しずつ落ち着く。高齢での出席で、不安が全くなかったというわけではなかったが、周囲のサポートで安心した。

職場の上司や、友人の心のこもつた数々のお祝辞をいただきながら時は流れる。多くの新しい出会いがあり、交流も深め、土地柄も識ることが出来た。そのうちに宴も終わりに近づき、新夫婦の謝辞で賑わいを極めた披露宴もお開きとなる。

秋のひとつときを心ゆくまで楽しみ、固い握手を交わしながら披露宴会場を後にした。